

【研究ノート】

フランス・ユダヤ人の協調を求めて

—1934年から1939年のユダヤ人新聞『リュニヴェール・イスラエリット』分析—

山 本 耕

要旨 1930年代のフランスでは、世界恐慌の波及やユダヤ人難民の流入をはじめとする諸要因によって、反ユダヤ主義が高揚していた。困難な状況に直面したフランスのユダヤ人は、事態を改善するべく様々な活動を行っていたのである。しかし難民の処遇などをめぐって対立が表面化し、彼らの活動が一本化されることはなかった。本稿は、ユダヤ人指導者のひとりで、1930年代後半に難民支援活動の主導権を握ったレモン・ラウル・ランベールに焦点をあてる。彼は、ヴィシー政権による反ユダヤ政策に関与したことで知られ、先行研究において注目を集めてきたのである。

ランベールは、官僚や難民支援団体幹部を務める傍ら、ユダヤ人週刊新聞『リュニヴェール・イスラエリット』編集長としても活動していた。同紙には彼の記名記事が多数掲載されており、それらは彼の主張を知る上で重要な史料となっている。しかしながら、先行研究では一部の記事だけが利用され、その総数や内容の全体的傾向は明らかにされてこなかった。したがって本稿の目的は、彼の記名記事を量的および質的に分析し、その全体像を示すことにある。

本稿の分析を通じて明らかになるのは、以下の点である。まず、ランベールが名実ともに『リュニヴェール・イスラエリット』編集部の中心人物であり、同紙を自らの主張を発信するための媒体として積極的に利用していたということ。そして、彼がフランスのユダヤ人に協調を呼びかけ、一丸となって危機に立ち向かうように求めているということである。ただしその協調とは、彼のようなユダヤ系フランス人を中心にしたものであり、ユダヤ系移民にフランスへの適応を求めるものであった。

キーワード：戦間期、フランス・ユダヤ人、新聞

はじめに

1930年代、フランスのユダヤ人は非常に困難な状況に直面していた。ドイツのみならずフランスでも反ユダヤ主義が影響力を増大させており、政府は排外主義に傾いていたのである。その中でユダヤ人指導者たちは自分たちに向けられた敵意に対処し、安全を確保するべく活動していた。そのひとりが、ユダヤ系フランス人レモン・ラウル・ランベール (Raymond-Raoul Lambert, 1894-1943) であった。本稿の目的は、ユダヤ系フランス人の週刊新聞『リュニヴェール・イスラエリット (*L'Univers israélite*; 以下 *UI*)』に掲載された彼の記名記事の全体像を説明することにある。

当時のフランスは、世界恐慌の波及や政治の分極化といった国内外の諸要因によって動揺していた。さらに1933年のナチ政権成立をはじめとした諸事件が発生し、中東欧からユダヤ人を中心とした難民が流入し続けたことも加わり、ユダヤ人を取り巻く状況は悪化していたのである。だが、いかにして難民に対応し、反ユダヤ主義へ対抗していくのかという問題は、国益の考慮などが絡んでユダヤ人指導者の間でも意見の一致を見ることはなかった。フランスのユダヤ人といっても、実際のところ彼らは社会的にも、経済的にも、そして文化的にも異なった背景を持った人々の集まりであり、そのことが方針の対立に大きく関わっていたのである。

ユダヤ人指導者たちは難民の処遇や自己防衛の方法を巡って対立し、反難民的な強硬派と親難民的な穏健派に分裂した。当時のランベールは官僚や難民支援団体幹部を務める若手指導者であり、穏健派の中心人物として活動していた。難民問題発生当初から、彼はフランスに同化したユダヤ人として、祖国の利益を害さない範囲で難民に援助の手をさしのべようと試みていた。有力なユダヤ系フランス人指導者が強硬派に傾く中で、ランベールの一貫した行動は希有なものだった。そしてこの時期の彼は、ジャーナリストとしての顔も持っていた。彼はユダヤ系フランス人の有力紙 *UI* 編集長を務め、同紙に数多くの記名記事を掲載していたのである⁽¹⁾。

ランベールは、のちにヴィシー政権の反ユダヤ政策に巻き込まれたこともあって、研究史上注目されてきた。1930年代の難民問題を扱った研究では穏健派の重要人物として、ヴィシー政権期のユダヤ人迫害に関する研究では同政権によって設立されたユダヤ人団体、在フランス・ユダヤ人総連合 (Union générale des israélites en France; 以下 *UGIF*) の指導者として分析対象となってきたのである。彼はユダヤ人の動向に影響を与えた人物のひとりであり、前述の新聞記事やヴィシー政権期における日記など数多くの史料を残した。最終的にホロコーストへと行き着く過酷なこの時代に、ユダヤ人は何を道標としてフランス社会で生きていたのか。彼の史料の分析は、そのことを理解する上で貴重な材料を与えてくれる⁽²⁾。

1930年代の難民問題をめぐる研究では、第二次世界大戦とドイツの占領による史料喪失という事情によって、研究が本格化した1970年代からユダヤ人新聞が史料として重視されてい

た。中でも *UI* は、ユダヤ人に関わる出来事を詳細に伝える情報源と位置づけられ、ランベール研究でも利用されてきた。ヴィッキー・カロン（Vicki Caron）は、難民問題に影響を与えた要因のひとつとしてユダヤ系フランス人指導者の対立に注目し、ランベールを穏健派の中心人物と位置づけた。そして彼の親難民的な主張を示す史料として、*UI* の記名記事を用いたのである。さらに彼女は、ランベールが難民問題などが原因となって対立していたユダヤ系フランス人の既得権益層を批判するために、同紙を自らの主張を展開する場として利用していたと述べている。また、リチャード・I・コーヘン（Richard I. Cohen）は先述した日記を発見し、その刊行に携わった。日記のイントロダクションにおいて彼は、*UI* の記事を通じて戦間期におけるランベールの愛国的で親難民的な主張を示し、ヴィシー政権期における主張との連続性を明らかにしたのである。以上のように先行研究では、ランベールの記名記事が部分的に利用されてきた。しかし、彼の記名記事の総数やそれらの内容に関する全体的傾向は明らかにされてこなかった。その原因としては、ヴィシー政権への「協力」といったスキャンダラスな要素を含んでいる彼の行動に注目が集まり、1930年代における彼の主張について分析がさほど進まなかったことなどが考えられる。これまでに筆者は、彼の記名記事の一部とヴィシー政権期の日記について分析してきているが、本稿では今後のランベール及びフランスのユダヤ人研究に不可欠な基礎データを得るべく、記名記事の量的および質的分析を行い、その全体像を明らかにする⁽³⁾。

最後に、*UI* の史料状況について述べる。この新聞は、ランベールが編集長を務めた1934年9月から1939年10月までに計257号を発行されているが、一部は散逸しているため、分析対象となるのはそのうちの230号である。これは全体の約89パーセントにあたり、本稿の目的を達成するためには十分な数値であると考えられる。また彼は、1937年4月に一度編集長の職を辞しており、1939年1月に再度就任している。しかしその間も彼は精力的に記事を寄稿し、*UI* 編集部で大きな役割を果たしていたものと推測されるため、この期間も検討対象に含める⁽⁴⁾。

1. 量的分析

1880年代のロシアにおけるボグロム、血の日曜日事件やロシア革命などの出来事は、大規模なユダヤ人の移動を引き起こした。それはヨーロッパを越えて拡大し、多くの人々が海を渡ってアメリカを目指したのである。この大移動においてフランスは、アメリカへの経由地としての役割を果たしたばかりではなく、故郷を追われた数多くのユダヤ人を受け入れていた。その一方で、この流入以前からフランスにもユダヤ人が居住していた。彼らはフランス革命における解放によって集団としての政治的自立性を失い、それ以後ユダヤ教を信仰するフランス国民として生きる道を選択していった。そして19世紀末には、フランス革命を神の摂理によるものと見なすほどにフランス的価値とユダヤ的価値を同一視した、同化のイデオロギー、フラン

コ＝ユダイズムを形成するまでに至ったのである。19世紀を通じてフランスへの同化を推し進めた彼らにとって、東方ユダヤ人の流入は自分たちと異なる歴史を辿った同胞との遭遇であった⁽⁵⁾。

移民流入に人口の自然増が加わり、19世紀初頭に5万弱であったフランスのユダヤ人人口は、1930年代末から40年代初頭には約30万に達していた。このうち半数がフランスへの同化を果たした、いわゆるユダヤ系フランス人であり、残り半数はユダヤ系移民であった。一般的に前者は官僚、軍人や自由業などの職業に就くことで社会的上昇に成功する傾向にあったが、後者は労働者、職人や商工業者などが中心であり、前者の方が経済的に豊かであったといわれる。フランスのユダヤ人はそれまでに比べ人口が増大したばかりではなく、出身地、政治的傾向、職業や習慣など様々な点において多様化していた。この変化はユダヤ人メディアにも反映されており、1930年代のフランスでは、フランス語からイデッシュ語まで、様々な雑誌や新聞が発行されていた。UIもそのひとつであり、1930年には国内外計18カ所の販売代理店を持つ有力紙として、ユダヤ人に関係する記事を掲載していたのである⁽⁶⁾。

UIは、1844年に創刊された最古のユダヤ人向けフランス語新聞といわれる。同紙の政治的傾向は反左翼かつ反右翼であり、1930年代の政治状況でいえば中道寄りだったが、難民問題では人民戦線に同調する場合もあった。ただしポーラ・ハイマン (Paula Hyman) が指摘するとおり、移民とは違ってユダヤ系フランス人プレスは政治的問題に対して明確な立場を示すことを避ける傾向にあり、その点ではUIも基本的には同様だった。ユダヤ系フランス人指導者の多くは、反ユダヤ主義が高揚する中で目立つことを避け、自らの愛国心を主張することでフランスへの同化を示しつつ、慎重に慎重を重ねて行動していたのである。UIの主な購読者はユダヤ系フランス人の中でも一定の教育を受け、経済的に余裕のあった人々と推測される。ただしデビッド・H・ワインバーグ (David H. Weinberg) は、非ユダヤ人もユダヤ人の状況を知るために同紙を購読していたと指摘している。とはいえ同紙はあくまでユダヤ人新聞であり、その影響力を過大評価することは出来ないが、フランス社会で一定の評価を受け、その記事がユダヤ人だけでなく非ユダヤ人の目にも触れていたことは間違いない⁽⁷⁾。

UIはランベールが編集長に就任すると同時にページ数、紙面サイズや紙面構成が変更された。そしてそれ以後の約5年間、同紙の紙面は基本的に16ページで構成され、ユダヤ人に関わる時事問題の論説からクロスワードパズルのような娯楽欄まで多種多様な記事を掲載していた⁽⁸⁾。第1表は、掲載された記名記事およびその執筆者の総数を表したものである。記名記事総数は3,162、執筆者は842名を数える。執筆者にはジークムント・フロイト (Sigmund Freud) やエマニュエル・レヴィナス (Emmanuel Lévinas) といった、現在でもその名を知られているフランス国内外の著名人が含まれており、UIの人脈の広さをうかがい知ることができる。執筆者ひとり当たりの平均執筆記事数は約3.8にすぎないが、第2表で明らかなように、

実際の執筆記事数には大きな偏りが見られる。1桁しか執筆していない人々が790名に上る一方で、49名が平均を大きく上回る2桁、さらに3名は3桁の記名記事を執筆していたのである。この偏りは、執筆者とUI編集部との関係性によるものと思われる。2桁以上の、平均値を大きく上回る執筆者はUIで定期的に記事を寄稿するような同紙と関係の深い人物であり、特に3桁以上執筆している人々は編集部内の中心的な人物と推測される。そして記名記事数の上位3名およびその執筆数を示したのが、第3表である。ランベールの記名記事数は137に上り、最多のJ. B.よりは少ないものの、全執筆者の中でも第2位につけている。以上のデータからランベールは編集長の職に就いていたというだけでなく、名実ともにUI編集部において中心人物であったことは疑いない。だがさらに重要なのは、彼が執筆していた記事の内訳である⁽⁹⁾。

本稿では記事形式を基準として、第4表のように記事を分類した。これらの記事の中でもUIの紙面構成上で中心となっていたのは、報道記事、論説そして解説である。報道記事は情報のみを伝えるものであり、論説や解説に比べてひとつの記事が小さい点が特徴である。さらにそれは、以下の3種類に分類できる。まず、パリのユダヤ人に関するもの。次に、アルジェリアを含む、フランス国内各県のユダヤ人に関するもの。最後に、フランス国外、特にヨーロッパ諸国とパレスチナのユダヤ人に関するものである。このカテゴリーの記事が伝える情報は、ナチによるユダヤ人迫害のような大きな問題だけではなく、国内各地で行われている催し物のような身近な話題まで多岐にわたる。これに対して論説は、各種の情報だけではなく、時事問題に対する執筆者の主張が記述されているものが該当する。前述のようにユダヤ系フランス人プレスは政治的問題の報道については抑制的だった。だが難民の流入や排外主義政策の強化といった事柄はユダヤ人に密接に関係しており、同紙は国益へ慎重に配慮を示しつつも、それらを論説で取り上げていたのである。解説は

第1表 記名記事・執筆者総数

	記名記事	執筆者
総数	3,162	842名

第2表 記名記事数の偏差

記事数	1~9	10~99	100~
執筆者数	790名	49名	3名

第3表 記名記事数上位者

氏名	記事数
J. B.	241
レモン・ラウル・ランベール	137
アルベール・レヴィ	114

1934年9月から1939年10月のUIを調査して得られたデータを基に、筆者作成。

第4表 記事形式による分類

分類	特記事項
報道記事	5W1Hのみを伝えるもの。
論説	政治、経済や社会などの時事問題を論じたもの。
解説	論説以外の様々な事柄に解説を加えたもの。
投書	
社告	
広告	
その他	インタビュー、小説や詩など、上記の6種に含まれないもの。

以下の論文を参考にして、筆者作成。真鍋一史「マス・コミュニケーションの調査——新聞記事の内容分析」『関西学院大学社会学部紀要』28号(1974), p. 15.

論説が対象とする時事問題以外の主題について扱ったもので、同紙の場合は演劇評や映画評のような文芸に関する記事や、名士紹介のような個人を扱った記事などがこれにあたる。広告はその大半が商店や商品の宣伝だが、論説記事に近い体裁の文章を伴ったものも存在している。記名記事はいずれの種別にも見られ、この分類が署名の有無と完全な対応関係にあるわけではないが、論説と解説には署名が存在することが多い。

第4表を基準にランベールの記名記事を分類すると、第5表のような結果になる。彼の記事の特徴は、そのほとんどが論説と解説に集中し、報道記事が存在しない点にある。内容に関しては後述するが、論説にはユダヤ人の置かれた現状や反ユダヤ主義の脅威などの時事問題、解説には前述のような文芸評論などが該当する。彼に比べると、最多執筆者の J. B. は大半が報道記事であり、論説や解説は少数である。ともに多数の記事を執筆しながらも、両者の傾向は大きく異なっていたのである⁽¹⁰⁾。

さらに、第一面の掲載記事を調査すると興味深い結果が得られた。分析対象の230号中ランベールの記名記事が第一面に掲載されているのは68号に上り、その掲載率は約30パーセントに達していたのである。第一面には前述したような著名なユダヤ人の単発記事が掲載される傾向にあり、同じ人物が継続して執筆することは希だった。彼の記事は掲載数が多かっただけでなく、第一面への掲載率が高かったこともあって、読者が彼の主張を目にする機会は多かったものと思われる。

カロンの指摘したように、ランベールは有力紙 *UI* を自らの主張を展開する場として利用していた。だがさらに付け加えるならば、1934年から1939年まで彼は編集部の中核人物であり、名実ともに同紙の顔だった。今回の分析のみならず、彼の編集長就任とともに紙面改革が行われたことから、彼の影響力の大きさをうかがうことができる。以上を踏まえると、この時期の *UI* は紙面全体の編集方針をはじめとして彼の影響下にあったといえるだろう。

2. 質的分析

ヒトラー政権成立後の1933年4月、ドイツでユダヤ人および左翼支持者が公職及び自由業から追放され、亡命者が続出した。隣国フランスにも1933年だけで25,000人余りが殺到し、そのうち85パーセントがユダヤ人だった。これ以降、1935年のザール併合、1938年のオーストリア併合、ミュンヘン協定やクリスタルナハトなど、ユダヤ人の存在を脅かし、彼らに居住地からの移動を迫るような事件が相次いで発生した。そのため1930年代末まで、時期による数の変動はあるものの、中東欧からユダヤ人の亡命が続いた。そして、難民流入と不況をはじ

第5表 記事形式によるランベールの記事分類

分類	記事数
報道記事	0
論説	83
解説	43
投書	0
社告	3
広告	0
その他	8
計	137

1934年9月から1939年10月の *UI* を調査して得られたデータを基に、筆者作成。

めとした不安定要因が複合することで、世論では反ユダヤ主義が影響力を拡大し、政府は排外政策を強めていったのである⁽¹¹⁾。

難民の流入と反ユダヤ主義の高揚を前にして、ユダヤ人指導者は何らかの行動を起こさざるを得なかった。そのため難民問題発生直後から、反ユダヤ主義の犠牲者・ドイツ難民救援国民委員会（Comité National de Secours aux Réfugiés Allemands Victimes de l'Antisémitisme）など、いくつもの難民支援団体が創設されたのである。難民支援では1935年まで強硬派が主導権を握り、支援活動が縮小したこともあった。だがカロンが明らかにした通り、1936年以降はランベールを中心とした穏健派に主導権が移行し、組織整備や国外からの資金調達などが行われ、再びその活動は活発化した。そもそもハイマンが指摘するように、その活動が政治と切り離されているかぎり、難民に対する慈善はユダヤ系フランス人指導者も協力し得る事柄だったのである⁽¹²⁾。

より困難だったのは、反ユダヤ主義に抵抗するために誰が誰とどのようにして協力し、活動していくのかということだった。ユダヤ系移民の側では、ユダヤ人共産主義者をはじめとした左翼諸勢力と、中産階級のユダヤ人諸団体が集ったフランス・ユダヤ人団体連盟（Fédération des sociétés juive de France）とで主導権を争いながら、ユダヤ人の統一組織を模索していた。この動きに対して、権威的宗教団体だった長老会のメンバーをはじめ、ユダヤ系フランス人指導者の多くは政治的問題にユダヤ人として関与することを忌避し、移民との協力にも消極的だった。フランスへの同化を完了したと自負する彼らの目には、街頭での大衆デモや抗議集会などをはじめとした過激な行動に出る移民が、フランスの現実を理解しない無分別な存在に映っていたのである。パリ長老会議長だったロベール・ド・ロチルド（Robert de Rothschild）が1935年に述べたように、彼らの間では移民の政治的活動が反ユダヤ主義の危険性を増大させていると考えられていた。結局フランスのユダヤ人の間に存在する溝が完全に埋まることはなく、彼らを代表し得るような統一組織は実現しなかったのである⁽¹³⁾。

ランベールがUIに数多くの記事を執筆していたのは、ユダヤ人を取り巻く環境が悪化していた、この時期のことであった。筆者は彼の記名記事について内容による分類を行い、図表化した。それが第6表である。ここでは、基本的にこの表に沿って数の多いものから内容を概説していくが、例外的にまず社告について取り上げる。なぜならこの種の記事にはランベールの編集長としての方針が示されており、彼がどのようなメディア認識や戦略に基づいて記事を執筆していたのかを知ることができるためである。

ランベールは1935年9月27日、1936年9月11日そして1939年1月6日の三度、「読者へ」というタイトルで社告を執筆した。前二者はユダヤ暦の年始、後者はランベールの編集長再任時に当たり、それらの中で彼は編集長としてUIの紙面改造や読者の拡大といった方針を示している。そのための具体的な取り組みとしては、先述したページ数や紙面サイズの変更に加え、クイズなど娯楽欄の創設、写真やイラストの増加、そしてスポーツ、演劇や映画に関する記事

の掲載などを指摘できる。彼の記事に文芸関連が多いのは、彼が学生時代以来この分野に対して関心を抱いていたこともあるが、読者を意識した戦略という側面もあったものと思われる。さらに彼は、同紙を現代のユダヤ人が生活する上で必須の情報源と位置づけ、読者に対して回し読みをやめ、定期購読するよう呼びかけている。他の記事において 20 世紀を「広告の世紀」と呼んだように、彼はメディアの重要性を明確に認識しており、読者を引きつける戦略を練った上で執筆や編集に当たっていたのである⁽¹⁴⁾。

以上の認識に基づいて執筆された記名記事の中で、最も数が多いのはユダヤ人コミュニティに関わる記事である。この項目には、ユダヤ人とは何かといった抽象的なものから、フランスに居住するユダヤ人の自己防衛組織設立案といった具体的なものまで、集団としてのユダヤ人に関する様々な記事が含まれている。前者の例としてはユダヤ人のフランスに対する適合性について強調した 1937 年 1 月 15 日の「ユダヤ人は〔秩序の〕破壊者か?」、後者の例としては新たなユダヤ人統一団体を創設する必要性を説いた 1935 年 2 月 1 日の「必要不可欠な連合」や、ユダヤ人の自己防衛について述べた 1936 年 6 月 26 日の「フランス・ユダヤ人の集団的安全のために」などがある。この項目の傾向を要約すると、以下のようになる。まず最初に、長老会と世界ユダヤ連盟 (Alliance Israélite Universelle) という歴史あるユダヤ系フランス人大組織の権威を認め、政治的活動に慎重な彼らに対して、リーダーシップの発揮とユダヤ系移民への歩み寄りを求めていることが挙げられる。この点に関連して、ランベールは長老会副議長ジャック・エルブロンネル (Jacques Helbronner) と対立しており、UI にその議論が掲載されたこともあった。次に指摘できるのは、宗教離れが進みユダヤ人アイデンティティが希薄化しつつあったユダヤ系フランス人に対して、ユダヤ人文化の復興を訴えていたことである。さらに、移民に対してフランス社会の事情を理解し、デモのような過激な行動を控えるよう求め、移民組織の中でも非左翼系のフランス・ユダヤ人団体連盟を重視する傾向が見られた。そして最後に、ユダヤ人と共産主義者を同一視する反ユダヤ主義的主張を否定し、自分たちがフランス共和国に相応しい存在だと強調していたことが指摘できる。ユダヤ人指導者のひとりとしてランベールもまた、ユダヤ人同士の協力が必要だと認識していた。しかし、基本的に反左翼の立場に立っていた彼が認め得る協力対象は限定されていたのであり、一連の記事からはその範囲を読み取ることができる⁽¹⁵⁾。

ユダヤ人コミュニティに関わる記事に次いで多いのは、名士追悼及び紹介記事である。この

第 6 表 記事内容によるランベールの記事分類

項目	記事数
ユダヤ人コミュニティ	30
名士追悼及び紹介	27
文芸関連	23
国際情勢	17
難民問題	10
人種主義及びフランス右翼	9
第一次世界大戦回想	6
インタビュー	5
カトリック教会	4
国家称揚	3
社告	3
計	137

1934 年 9 月から 1939 年 10 月の UI を調査して得られたデータを基に、筆者作成。

項目は、故人に関する記事と存命中の人物に関する記事に区分できる。そしてさらに前者は、死亡してから間もない人物に対する追悼と過去の偉人に対する顕彰に分けられる。内訳としては、名士追悼が18、偉人顕彰が4、そして存命中の人物紹介が5となっている。その対象にはユダヤ人と非ユダヤ人の双方が含まれており、前者の例としては、アルフレド・ドレフュス（Alfred Dreyfus）の顕彰記事、シオニズムの支援者として知られるエドモン・ド・ロチルド（Edmond de Rothschild）の追悼記事やドイツの詩人エルゼ・ラスカー・シューラー（Else Lasker-Schüler）の紹介記事などが挙げられる。後者は前者に比べ数が少ないものの、国内外で知られた著名人が対象となっており、例としては元フランス大統領レモン・ポワンカレ（Raymond Poincaré）や教皇ピウス11世（Pius XI）の追悼記事などがある。この項目の記事が主な対象としているのは各居住地域に同化したと見なされるユダヤ人であり、彼らを称えることが目的となっている⁽¹⁶⁾。

文芸関連の記事は、さらに映画評、演劇評そして書評に分けられる。その内訳は、映画評が10、演劇評が10、書評が3であり、前二者に集中している。評論の大半が当時のフランスで上映あるいは上演されていた著名な作品であって、ユダヤ人に関わるものは少ない。映画ではチャーリー・チャップリン（Charlie Chaplin）の『モダン・タイムス』やルネ・クレール（René Clair）の『幽霊西へ行く』、演劇ではロマン・ロラン（Romain Rolland）の『7月14日』やジャン・ジロドゥ（Jean Giraudoux）の『トロイ戦争は起こらない』などが挙げられる。ただ書評ではユダヤ人に関するものも取り上げており、ドイツ出身のシオニストであるヒューゴ・マルクス（Hugo Marx）の著作、『現代のユダヤ人』を紹介している。同書においてマルクスは、ユダヤ人がパレスチナを中心地としたひとつの民族であり、それ以外の地に同化することはできないと主張していた。フランスをはじめとした自由主義諸国への同化を支持するランベールは、マルクスの主張を反ユダヤ主義者に攻撃の隙を与えるものとして厳しく批判したのである。ランベールはユダヤ人の連帯という文脈ではシオニズムに好意的だったが、ヨーロッパからの脱出とパレスチナへの民族的母国の建設に対しては明確に反対を表明していた⁽¹⁷⁾。

国際情勢に関する記事で言及されているのは、基本的にフランス国外における反ユダヤ主義の動向であり、その主な対象は当然ながらナチス・ドイツだった。ニュルンベルク法を取り上げた1935年9月20日の「ドイツにおける反ユダヤ法—野蛮」をはじめとする記事の中で、ランベールはナチスの反ユダヤ政策を、中世の野蛮を再現するものとして厳しく批判していたのである。そのため記事で取り上げられている地域には大きな偏りが見られ、ドイツに関するものが9と最も多く、ルーマニアが5、イタリアが1、アメリカが1、パレスチナが1であった。ドイツに次いでルーマニアが多く見られるのは、当時のルーマニア国王カロル2世（Carol II）が反ユダヤ主義を容認する独裁者として非難の対象となっていたためであり、ランベールは彼を「ブカレストのヒトラー」と呼んでいた。ランベールはドイツの工作がルーマニア情勢に影

響を与えていると述べて、ヨーロッパにおける反ユダヤ主義拡大の主な原因を、ナチスのプロパガンダに求めているのである⁽¹⁸⁾。

難民問題に関する記事は、難民の処遇や支援活動の正当性などについて論じている。例としては、ユダヤ系フランス人大組織には難民への積極的支援を、難民にはフランス語の習得をはじめとしたフランス社会への適応を要求した1934年10月12日の「ドイツ移民の将来とフランス世論」や、人口問題や国防に対する難民の貢献について主張した1939年4月14日の「人口減少と外国人嫌悪」などを挙げることができる。ランベールは穏健派指導者として難民への支援を訴えていたが、それはフランスの現実を十分に理解しているユダヤ系フランス人が主導するべきと考えていたし、難民に対しても少しでも早くフランスの生活ルールを理解するよう求めている。そして彼の難民擁護論は常に国益とリンクする形で展開されており、彼らをフランスへ利益をもたらす存在と位置づけることで支援活動を正当化していたのである⁽¹⁹⁾。

人種主義及びフランス右翼に関する記事は、基本的にフランス国内の問題を取り扱った記事が該当する。ランベールは人種主義を科学的反ユダヤ主義と定義した上で、フランス右翼の主張もそれに類するものと見なしていた。そのため、このふたつに関する記事は同じ項目に分類している。その具体例としては、フランスにおける反ユダヤ主義的著作の出版を非難した1937年1月8日の「毒」や極右週刊誌『ジュ・スイ・パルトゥ』について取り上げた1938年4月29日の「パリにおけるゲッベルス」などを挙げることができる。彼は人種主義がドイツを発生源とした思想であり、フランスの本質には何ら関係がないものと位置づけていた。ランベールのこうした見解はヴィシー政権期でも変わらず、同政権の反ユダヤ政策がドイツの命令に基づくものだという見方や、UGIF指導者への指名を受諾するという決断にも影響したものと思われる⁽²⁰⁾。

第一次世界大戦の回想記事は数こそ少ないものの定期的に執筆されており、ランベールの強い思い入れを感じさせる。その中でも注目すべきは、1935年から1938年までの計4回にわたって、第一次大戦休戦記念日前後に執筆された記事である。1936年11月6日の「11月11日に対する我らの思い」や1938年11月11日の「20年後」などが、それにあたる。これらの記事で彼は大战当時の記憶を回想して敵味方双方の犠牲者を悼むとともに、国家への奉仕や団結を賞賛している。フランス革命以来、兵役はユダヤ人にとって国民としての重要な責務であり、ユダヤ教の側もそれを承認してきた。第一次大戦ではユダヤ系フランス人とユダヤ系移民の双方が数多く動員されており、ランベールもそのひとりだった。この種の記事を通じて彼は国家への変わらぬ忠誠を示し、第一次大戦におけるユニオン・サクレのような、宗派や民族を越えた団結を呼びかけていたのである⁽²¹⁾。

インタビュー記事で対談を行っている人物は、大ラビのジュリアン・ヴェイユ (Julien Weill) や下院議員ジャン・ピエール・ブロック (Jean Pierre-Bloch) などのユダヤ系フランス

人である。ランベールはこれらの記事において基本的には聞き手であり、彼の主張は記事の中心ではない。ただこの種の記事で取り上げられているのは社会的地位の高い人々であり、UIの持つコネクションの豊かさをうかがい知ることができる⁽²²⁾。

ランベールはカトリック教会に関する記事もいくつか執筆している。その例としては、ともにナチス・ドイツの迫害にさらされているユダヤ人とキリスト教徒の現状について述べた、1936年5月29日の「ローマとベルリン」などを挙げることができる。彼は宗派を越えた連帯を重視しており、ユダヤ人コミュニティに関する記事でも、ラビたちに対してキリスト教徒との協力の重要性を主張していた。また彼はナチスへの批判を展開する中で、人種主義を「新たな異教」、フランスをはじめとした自由主義諸国を「ユダヤ・キリスト教文明」と位置づけてその対立構図を説明していた。宗派を越えた団結を求めるランベールにとって、ユダヤとカトリックの協力は必要不可欠なものであったのである⁽²³⁾。

国家称揚そのものを目的とした記事は多くはない。数少ない例としては、革命記念日におけるアルベール・ルブラン（Albert Lebrun）大統領の演説を引用してフランス帝国を称えた1939年7月21日の「フランス帝国の救済に向けた祈り」などがある。この種の記事からはランベールの強烈な愛国心のみならず、フランスでは自由と平等への門戸が開かれていることを根拠に、ムスリムや黒人の支配を正当化する彼の姿勢を読み取ることができる。彼は植民地支配の支持者でもあり、帝国の拡大をフランス革命と並ぶフランスの偉大なる使命と捉えていたのである⁽²⁴⁾。

以上がランベールによって執筆された記名記事の全体像である。彼の記事は基本的にユダヤ人に関係する話題について記述されているが、ナチスに対する批判のような切迫したものから、映画評論のような娯楽目的のものまで、その内容は多岐にわたっていた。だが社告に見られた彼のメディア認識や戦略を念頭に置くと、彼の記名記事に通底するひとつの傾向を見いだすことができる。それは、彼がより多くの読者を引きつけ、困難な時代状況の中で自己防衛や状況改善の方策を示そうとしていたということである。一見すると彼の記名記事の中で浮いているように思われる、ユダヤ人には関係しない記事も、彼の戦略の中でひとつの役割を持っていたと考えられるだろう。

おわりに

UIはユダヤ系フランス人の有力紙であり、1934年から1939年までランベールは同紙で多数の記事を執筆していた。もちろん彼の他にも執筆者は存在し、同紙には3,000を越える記名記事が掲載されていたが、彼の記事数はその中でも上位を占めていたのである。そして彼の記事は数が多いだけでなく、そのほとんどが彼の見解を含んだ論説や解説であり、カロンが述べたように同紙は彼が自らの主張を展開する場となっていた。また、彼の記事は一面への掲載率が非常に高く、読者の目に触れる機会は多かったものと思われる。編集長就任時の紙面改革

なども考慮すれば、彼がこの時期の *UI* 全体を名実ともに主導していたことは間違いない。

ランベールが *UI* 編集長を務めていた 1930 年代のフランスは、政治的、経済的そして社会的に動揺していた。その中でもユダヤ人は難民問題と反ユダヤ主義の高揚に直面し、より切迫した危機感を抱いていたのである。フランスのユダヤ人指導者たちは山積する問題への対処に追われており、ランベールもそのひとりだった。そしてこの困難な時代状況は、彼の記名記事の主題選択や内容に反映されていた。彼は多種多様な記事を執筆し、一連の記事を通じてユダヤ人がいかに行動していくべきなのかということを示そうとしていたのである。

ランベールは、*UI* においてユダヤ人同士の協力を呼びかけると同時に、彼らによる祖国への奉仕を賞賛していた。第一次大戦に従軍し、戦間期には官僚として働き、そしてヴィシー政権期にも変わらぬ友情を向けてくれる非ユダヤ人の友人を持っていた彼にとって、祖国フランスはその身を捧げるべき対象だったのである⁽²⁵⁾。そのため彼はフランスへ強い信頼を抱き、反ユダヤ主義をその本質から外れた思想として切り捨てていた。同時に彼は、ユダヤ人の側にもフランスに相応しい存在であることを求めた。彼は基本的に左翼には敵対的で、協力すべき移民として重視していたのも中産階級のユダヤ人諸団体が連合したフランス・ユダヤ人団体連盟だった。彼にとって *UI* は自らの主張を展開する場であり、さらにいえばフランスに相応しいユダヤ人とそうではない人々を差異化し、前者に協調を呼びかけるための媒体でもあったのである。以上の分析によって、彼が執筆した記名記事の全体像は明らかになった。今後は彼の主張が、当時のフランス社会やユダヤ人コミュニティにおいていかなる意味を持っていたのかを考察していく。これについては別稿にて論じたい。

注

- (1) ランベールの戦間期における主張と行動の概要については、以下を参照されたい。拙稿「レモン・ラウル・ランベールのユダヤ系フランス人アイデンティティ——一九三三年から一九四三年のフランスにおける難民問題とユダヤ人」『人民の歴史』206号(2015), pp. 39-50.
- (2) 1930年代の難民問題に関する研究については、以下を参照。Vicki Caron, "The Politics of Frustration: French Jewry and the Refugee Crisis in the 1930s," *The Journal of Modern History*, Vol. 65, No. 2 (1993), pp. 311-313; Id., *Uneasy Asylum: France and the Jewish Refugee Crisis, 1933-1942* (Stanford University Press, 1999), pp. 1-11, 354-364. ヴィシー政権期のユダヤ人迫害に関する研究については、以下を参照。Michael R. Marrus, "Jewish Leaders and the Holocaust," *French Historical Studies*, Vol. 15, No. 2 (1987), pp. 316-318, 326-328; Michel Laffitte, *Un engrenage fatal: L'UGIF face aux réalités de la shoah, 1941-1944* (Liana Levi, 2003), pp. 19-20; Yerachmiel (Richard) Cohen, "A Jewish Leader in Vichy France, 1940-1943: The Diary of Raymond-Raoul Lambert," *Jewish Social Studies*, Vol. 43, No. 3/4 (1981), pp. 305-306; Richard I. Cohen, "Preface," Raymond-Raoul Lambert, *Diary of a Witness, 1940-1943* (Ivan R. Dee, 2007), pp. x-xi.
- (3) *L'Univers israélite* の研究上の利用については、以下を参照。David H. Weinberg, *A Community on Trial: The Jews of Paris in the 1930s* (University of Chicago Press, 1977), pp. xii-xiii; Caron, "The Politics of Frustration," pp. 311-356; R. I. Cohen, "Introduction," *Diary*, pp. xv-lxvi. なおカロン以前の 1930 年代の難民問題に関する研究においてランベールは、彼女が既得権益層と評した有力なユダヤ系フランス

- 人指導者たちのスポークスマンと位置づけられていた。それは *UI* が彼らから補助金を得ていたことなどを根拠としていたものと思われるが、彼女は、そうした経済的支援があったにもかかわらず、彼が同紙において自己の主張を展開していたことを指摘したのである。この点については、Weinberg, *op.cit.*, pp. 37, 66; Caron, *Uneasy Asylum*, p. 557. また筆者によるランベール研究については、拙稿「レモン・ラウル・ランベールのユダヤ系フランス人アイデンティティ」; 同「UGIF 指導者レモン・ラウル・ランベールの日記—ヴィシー政権期ユダヤ人迫害とユダヤ系フランス人」『駿台史学』149号(2013), pp. 109-133.
- (4) ランベールの編集長在任期間は、以下の史料で確認できる。*UI* (7-14 septembre, 1934), p. 1; *Ibid.* (16 avril, 1937), p. 491; *Ibid.* (13 janvier, 1939), p. 281; *Ibid.* (20-27 octobre, 1939), p. 27.
- (5) Esther Benbassa, *Histoire des Juifs de France* (Seuil, 2000), pp. 119-204; Michael R. Marrus, *The politics of assimilation: a study of the French Jewish community at the time of the Dreyfus Affair* (Clarendon Press, 1971), pp. 86-163; Weinberg, *op.cit.*, pp. 2-4; 有田英也『ふたつのナショナリズム—ユダヤ系フランス人の「近代」』(みすず書房, 2000), pp. 28-204; 加藤克夫「近代フランス・ユダヤ人のアイデンティティ試論——長老会体制とフランコ・ユダイズム」『立命館言語文化研究』4号(2004), pp. 33-49.
- (6) Benbassa, *op.cit.*, pp. 225-251; Denis Peschanski, *La France des camps: L'Internement, 1938-1946* (Gallimard, 2002), p. 348; Weinberg, *op.cit.*, pp. xii-xiii, 22-36; *UI* (17 octobre, 1930), p. 130; 加藤克夫「第一帝政とフランス・ユダヤ人—「同化」イデオロギーと長老会体制の確立」『社会システム論集：島根大学法文学部紀要社会システム学科編』8号(2003), pp. 23-47.
- (7) Paula Hyman, *From Dreyfus to Vichy: The Remaking of French Jewry, 1906-1939* (Columbia University Press, 1979), pp. 217-218; *UI* (16 juillet, 1937), pp. 693-694; Caron, "The Politics of Frustration," p. 332; *UI* (24 février 1939), p. 420; Weinberg, *op.cit.*, p. 25.
- (8) ランベールの編集長就任時に *UI* は、それまでの 32 から 16 にページ数を変更するとともに、紙面のサイズを大型化した。それまで紙面の前半に配置されていたユダヤ教関係の告知欄を後半に移動し、第一面に論説を掲載するなど、構成についても大幅に変更を行った。これに関しては、*UI* (31 août, 1934), pp. 689-720; *Ibid.* (7-14 septembre, 1934), pp. 1-16.
- (9) *Ibid.* (8 mai, 1936), p. 513; *Ibid.* (21 mai, 1937), pp. 569-570. 記名記事の署名は、フルネーム、イニシャル、ファーストネームのみイニシャル、そしてペンネームの 4 種類が見られる。記名記事総数と執筆者総数に関しては掲載段階での誤植やフルネームとイニシャルの混在による人物同定の困難さもあり、誤りを含んでいる可能性を否定できない。しかしそれはあくまで誤差の範疇であり、本稿の分析に大きな影響はないといっていよい。なお、ランベール以外の記名記事数上位者に関する詳細は不明である。
- (10) その他の項目には、インタビュー記事や投書へのコメントなどが含まれる。
- (11) Benbassa, *op.cit.*, pp. 225-226; Caron, "The Politics of Frustration," pp. 313-318; Hyman, *op.cit.*, p. 201; 渡辺和行『エトランジェのフランス史—国民・移民・外国人』(山川出版社, 2007), pp. 104-137.
- (12) Caron, "The Politics of Frustration," pp. 318-320, 323-350; Hyman, *op.cit.*, pp. 220-221; 渡辺『エトランジェのフランス史』, pp. 141-144.
- (13) Hyman, *op.cit.*, pp. 199-230; Weinberg, *op.cit.*, pp. 22-36.
- (14) Raymond-Raoul Lambert, "A NOS LECTEURS," *UI* (27 septembre, 1935), p. 2; Id., "A NOS LECTEURS," *UI* (11 septembre, 1936), p. 4; Id., "A NOS LECTEURS," *UI* (6 janvier, 1939), p. 267; Id., "LA THESE D'ISRAEL dans la symphonie française," *UI* (8 avril, 1938), pp. 501-502; 拙稿「レモン・ラウル・ランベールの日記」, p. 116; 同「レモン・ラウル・ランベールのユダヤ系フランス人アイデンティティ」, p. 41.
- (15) Raymond-Raoul Lambert, "L'UNION NÉCESSAIRE," *UI* (1 février, 1935), p. 321; Id., "POUR UNE UNION JUIVE DE FRANCE," *UI* (30 août, 1935), p. 791; Id., "Pour la sécurité collective du Judaïsme français," *UI* (26 juin, 1936), pp. 629-630; Id., "CORRESPONDANCE—JUDAÏSME ET POLITIQUE," *UI* (17 juillet, 1936), p. 688; Id., "Le Judaïsme est-il subversif?," *UI* (15 janvier, 1937), pp. 292-293.
- (16) Id., "LA FRANCE EN DEUIL," *UI* (19 octobre, 1934), pp. 81-82; Id., "LE BARON EDMOND DE

- ROTHSCHILD," *UI* (9 novembre, 1934), p. 130; Id., "Sa vie," *UI* (19 juin, 1936), p. 617; Id., "UN GRAND PAPE," *UI* (17 février, 1939), p. 381; Id., "Un Héros bien à nous: Alfred Drefus," *UI* (23 octobre, 1936), pp. 97-98.
- (17) Id., "LE CINÉMA—Aux Miracles Lord Byron: Fantôme à vendre de René Clair," *UI* (6 mars, 1936), p. 381; Id., "LE CINÉMA—AU THEATRE MARIGNY: Les Temps Modernes de Chalerlie Chaplin," *UI* (3 avril, 1936), p. 436; Id., "LE THÉÂTRE—A l'Athénée: La Guerre de Troie n'aura pas lieu, 2 actes; Supplément au voyage de Cook, 1 acte, de Jean Giraudoux," *UI* (28 février, 1936), p. 360; Id., "LE THÉÂTRE—A l'Alhambra: 《14 Juillet》 de Romain Rolland, spectacle organisé par la Maison de la Culture," *UI* (7-14 août, 1936), p. 734; Id., "Les Livres et les Idées," *UI* (11 juin, 1937), pp. 617-618.
- (18) Id., "Les lois antijuives en Allemagne—Barbarie," *UI* (20 septembre, 1935), p. 841; Id., "HITLER A BUCAREST, GOEBBELS A PARIS," *UI* (29 janvier, 1937), pp. 321-322.
- (19) Id., "L'avenir de l'émigration allemande et l'opinion française," *UI* (12 octobre, 1934), p. 65; Id., "Dépopulation et Xénophobie," *UI* (14 avril, 1939), p. 521.
- (20) Id., "LE POISON," *UI* (8 janvier, 1937), p. 273; Id., "Goebbels à Paris," *UI* (29 avril, 1938), pp. 545-546; 拙稿「レモン・ラウル・ランベールの日記」, pp. 121, 124-125.
- (21) Id., "La méditation du 11 Novembre," *UI* (15 novembre, 1935), pp. 113-114; Id., "Nos penées au 11 Novembre," *UI* (6 novembre, 1936), p. 129; Id., "11 Novembre, où sont tes joies et tes espoirs ?," *UI* (5 novembre, 1937), pp. 145-146; Id., "VINGT ANS APRÈS," *UI* (11 novembre, 1938), pp. 105-106, 109.
- (22) Id., "AVANT LES ÉLECTIONS—Un entretien avec M. Julien Weill, Grand-Rabbin de Paris," *UI* (6 mars, 1936), pp. 481-482; Id., "Le problème Algérien—Déclarations de M. Pierre-Bloch, Député de l'Aisne, Vice-Président de la Commission d'enquête en Algérie," *UI* (4 mars, 1938), pp. 417-418.
- (23) Id., "CONTRE LES PERSÉCUTIONS RACISTES—Appel aux Grands-Rabbins d'Europe," *UI* (18 octobre, 1935), pp. 49-50; Id., "ROME ET BERLIN," *UI* (29 mai, 1936), p. 561.
- (24) Id., "Prière pour le salut de l'Empire français," *UI* (21 juillet, 1939), p. 789; Id., *Carnet d'un témoin, 1940-1943* (Fayard, 1985), pp. 71-72.
- (25) 拙稿「レモン・ラウル・ランベールの日記」, pp. 117-122, 124.

付 記

本稿は、拙稿「史料紹介：ユダヤ人新聞『リュニヴェール・イスラエリット』——レモン・ラウル・ランベール編集長在任期を中心に」『文学部・文学研究科学術研究論集』5号（2016）, pp. 97-108. に加筆及び修正を加え、改稿したものである。

Searching for Harmony among French Jews: Analysis of the Jewish Newspaper *L'Univers Israélite*, 1934-1939

YAMAMOTO Kō

Anti-Semitism rose in France in the 1930s, driven by factors like the Great Depression and the influx of Jewish refugees. French Jews facing this difficult situation tried to improve their lot in a range of ways. However, conflict arose over the treatment of refugees, and their activities were not integrated. This paper focuses on Raymond-Raoul Lambert, a Jewish leader, who took the initiative in leading support activities for refugees in the latter half of the 1930s. Lambert is also known for his involvement in the Vichy regime's anti-Semitic policies, and has attracted attention in previous research.

Lambert was a bureaucrat, a leader of the organization that assisted refugees, and worked as chief editor of the Jewish weekly newspaper *L'Univers israélite*. A large number of his signed articles appeared in the newspaper, serving as important historical material reflecting his opinions. However, previous research has focused on only a few articles, not revealing their total number or overall trend in terms of content. Therefore, this paper aims to present a quantitative and qualitative analysis of Lambert's signed articles, and to reveal the overall picture they portray.

The analysis makes a number of points clear. First, Lambert was a central figure in the editorial department of *L'Univers israélite* in both name and reality, and actively used the newspaper as a medium for transmitting his opinion. Second, he appealed to French Jews for harmony and requested them to work together in dealing with the crisis. Such harmony, however, was centered on Jewish French like himself, requiring Jewish immigrants to adapt to French society.

Keywords: Interwar period, French Jews, newspaper.